ＭＨＰ３ｒｄ fightingハンター

へちゃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＭＨＰ３ｒｄ　ｆｉｇｈｔｉｎｇハンター

【Ｎコード】
Ｎ７６５１Ｚ

【作者名】
へちゃ

【あらすじ】
温泉で一躍有名なユクモ村に一人の男ハンターがきました。彼はただ温泉ツアーで温泉入りに来たら、しょんな事から狩りにレッツラＧＯ。彼の運命やいかに。

第1話・ようこそ！温泉天国ユクモ村！

「熱い！！」
彼はそう叫びながら温泉から勢い良く立ち上がった。バシャっと飛び散る水しぶきが、近くでドリンクを売るアイルーにかかるほど勢い良く。
「だ、旦那。大丈夫ですかい？」
ドリンク売りのアイルーが驚いたように男に問いかける。
「メチャクチャ熱いじゃねーか！、俺は熱いのが苦手っつったろ！、俺はこの温泉が目的でこの「ユクモ村」に来たのに、もっとぬるくならないのか？」
と、男はドリンク売りに大声でクレームをつけた。
「しかし、他のお客様に迷惑ですニャ。申し訳ないけど温度は変えられないニャ。てか、熱くても我慢するニャ。」
「なんだとぉ。こっちははるばる遠くからこの温泉入りになぁ、来たんだぞ。
俺はお客様だぞぉ！」
ドリンク売りと男の大人げない会話を聞いていた、他の客数人が迷惑そうな顔をして客同士ヒソヒソ何か言っている。
「他のお客様に迷惑ですニャ。悪いけど出ていってもらえますかニャ？」
ドリンク売りと男の言い合いに割って入るように番台の別のアイルーが男に言う。すると男は。
「分かったよ。熱くても我慢すればいいんだろ。」　と言うと、また文句を言いながら温泉に浸かった。
アイルー達は、ハァ～と顔をうつむけて疲れたといった様なため息をついた。一方彼は、タオルを小さくたたんで頭に乗せ、ふてくされたような顔をして静かに温泉に浸かっていた。
「熱い、出る」

数分もしないうちに、彼は立ち上がって温泉からでた。ホカホカと白い湯気を立てながら温泉の出口に向かう。
「毎度ありニャ。」
さっきの番台のアイルーが彼にそう言った。
それを聞いてか聞かずか、彼はそそくさと温泉を出ていった。彼はタオル姿から自分の防具に着替えた。
彼の防具はフロギー一式
おもに水没林などに生息する、「ドスフロギー」という大型のモンスターの素材から作られている。とても強い防具という分けではないが、彼のお気に入りの防具だ。防具は多数のキズや汚れ、色あせた跡がある。かなり使い古された防具である。見た目はオレンジ色をメインとして、テンガロンハットの様な帽子をかぶり、口もとは布のようなもので隠されていて、背中には大きなマントが垂れ下がっている。
武器は「ドロスボーンソード」という大型の剣を背負っている。小型の水獣の素材をベースに骨などで作り上げた一品である。
着替えが終わり、暇潰しに何かクエストを受けよとギルドカウンターに向かう。カウンターにはクエストを受けようと数人のハンターで賑わっていた。彼と同じようにソロの者や楽しそうに談笑しながらクエストを選ぶパーティー。
「うーん。どのクエストを受けようかなぁ…」
彼は人と人の間をすり抜けてカウンターでクエストを選んでいた。
すると彼の目はあるクエストに目が止まった。
　　クエスト名
「強襲する孤島の水流！」（ロアルドロス一頭狩猟）だった。
「よし。これにしよう。丁度コイツ（ロアル）の素材欲しかったし。」
彼はカウンターの人に話しかけようとした。「すいませ…」
までいいかけたその時、彼は気がついた。
契約金２００ｚ　　所持金１８３ｚという事実に。

ギルドの人が「はい。なんでしょうか？」
こちらに気がついて言葉を返してきた。
「あ…、やっぱり何でもないですぅ～　　ハハぁ」
こんなにやるせない気持ちは久しぶりだ。
「なぜこれしか無いんだ。まさかスリかぁ！？」
しばらくカウンターから少し離れた場所で考えていた。　しばらくして答えが解った。　温泉に入る少し前に間違えて回復薬９９個買ってアイテムＢＯＸに送ってしまったのだ。
仕方なく回復薬を３つ売りなんとか所持金２００ｚ越えをし、さっそくカウンターにクエストを受けに行く。
　　が…　　時既に遅し。
「すいません。そのクエストは先ほど他のハンターさんが受けてしまいました。申し訳ありません。」
と、ギルドの人が言った。男は諦められずこう言った。
「そのハンターは誰だ？どのハンターだ？　もう出発したのか？」
するとギルドの人は
「あちらのお方ですけど」と一人のハンターを指さした。そのハンターは背が低く、１６０？位の背丈、色あざやかな防具、ペッコ一式に身を包み背中には、オノのような短剣を背負い。右手には小さな盾がついていた。おそらく片手剣だろうか。男はそのハンターに後ろから声をかけた。
「おい、そこのペッコのハンターさん。そこのちっこいアンタだよ」
するとそのハンターは振り返り彼と目があった。
男は驚いた。
「お前、まだガキじゃねーか…」
そのハンターはまだ少年のような顔立ちで、１７か１８辺りにみえた。するとペッコ装備の少年はこう言った。
「僕はガキじゃないです。ちゃんとした名前があるんですけど。それよりおじさん何ですか？」「クソガキァァ！　誰がおじさんジャァ！、俺は二十五歳だ。おにいさんだろがぁ」

その瞬間、一気に静まる周りの話し声、集中する視線「あの…もう行ってもいいですか？」とペッコの少年が男に言った。
我にかえった男は目的を思いだし少年に持ちかける。「あのさ、そのクエスト俺も連れて行ってくれない？さっき大声出したの謝るからさ。」
すると少年は
「え？何で初対面の人と狩りに行かなきゃいけないんですか？　」
男は言った。
「そのクエスト俺も受けようと思ってたんだけど、丁度アンタに先こされたんだよ。なぁ、これも何かのえんだろ、頼むよ。」
えー、と少し考え込む少年にさらにたたみかける。
「もちろん俺は途中で裏切らないし。あ！そうだ。報酬で回復薬あげるからさぁー、お願いしますよ～」
すると少年はこう言った。「分かったよ。じゃあこの狩りだけね。それともうひとつ。僕の名前はガキじゃない。　僕はグランて名前なの。」
すると男は
「ありがと。あと俺からも一つ。俺はおじさんじゃない。俺はビィルてゆうんだ。よろしくな！」

第2話・強襲！ロアルドロスにご用心！

「着きましたよ。ちょっと！、起きてくださいよ。ヴィルさん！」
暖かい日ざしと見知らぬ声、いや。かすかに聞き覚えのある声が馬車の中で気持ちよさそうに寝ているヴィルを起こした。
「ん？どこだここ…、てか誰アンタ？」
と、半開きの目でグランに問いかけた。　あきれたようにグランが言う
「何寝ぼけた事言ってんですか。ここは孤島ですよ。ほら、早く馬車から降りてベースキャンプに向かいますよ。」
グランはそう言って馬車から降りてヴィルを見つめた。するとヴィルは出発前のことを思いだしたように。
「あ。ちょっと待ってくれよ～」
と、グランの後に続いて馬車から降りた。
ベースキャンプに向うと言ったが、すぐそこなのでグランはスタスタとヴィルを待たずに歩きだした。
「待て待て待て！！」
後ろからヴィルが大声出して、ドタドタ追いかけてきた。ヴィルは歩いていたグランの横についた。
「ちょっと待ってくれよ。置いてくなんて酷いぜ。」と言いながらグランの肩を軽く叩いた。
グランはチラッとヴィルの方を少し見て、また前をみた。少し気まずい雰囲気になる。しかしヴィルが話しかける。
「なぁグラン。怒ってんのか？」
「別に怒ってないですけど。」　とのグランの返事にヴィルは。
「せっかく一緒に狩り来たんだから、仲良くなろうぜ！」
ヴィルは明るくグランに言った。「ヴィルさんはなんでハンターやってんですか？」
グランがヴィルに話しかけた。

突然の質問にヴィルは答える。
「親父がハンターだったんだ。まだ俺がガキだった頃によく狩りに連れて行ってもらったよ。」
懐かしそうにヴィルが言った。それを聞きグランは。「お父さんの後取りでハンターやってるんですか…」「いや…」
グランの話しをさいぎるようにヴィルが言った。
「後取りじゃないんですか？」　グランは横目にヴィルに言った。
「かたきうちだよ、　親父のかたきをうつためにハンターやってるんだよ。」「かたき？」
「そう、ずっと昔の話しなんだけどな、俺をかばって親父は死んだ。長話しになるから今度話すよ。」
今までニタニタ笑っていたヴィルの顔が、どこか少し悲しげだった。
「別に話さなくてもいいですよ。」
グランはそう言うと足早にベースキャンプに向かった。
ベースキャンプに到着した二人はそれぞれ自分の装備やアイテムなどの整理、準備をしていた。
準備がすんだ二人は早速ロアルドロスの捜索に向かうことにした。
「どうやって探すか？」
ヴィルがグランに問いかけるとグランは答えた。
「手分けして捜索しましょう。先に見つけたほうがペイントボールをつけましょう。」
グランの提案にヴィルがうなずく。
「了解。」ベースキャンプの前で二人は別の道に進んだ。
「ロアルドロスって水獣だろ？　じゃあ水辺にいるだろ。」
ヴィルは水辺を目指して進み始めた。
しばらくして小型のモンスターがちらほら見かけるようになった。
ヴィルは小型モンスターには目もくれず、ただロアルドロスの捜索にせんねんした。ロアルドロスを探し始めて時間だけがどんどん経過していく。
「どこだ…ロアルドロスは、出てこいよ…」

歩き疲れたヴィルは力なくそう言うと、近くの大きな岩によりかかった。
足下にはルドロスが3頭こちらにむかって吠えていた。と。そのときヴィルは異変に気がつく。
まず、岩だと思っていた物は黄色く、すこし濡れている。そして足がはえていた。「！！！！」
ヴィルがそれに気がつくと同時に巨大な尻尾がヴィルの腹部に強く叩きつけられた。
不意うちの一発に、腹部の強烈な痛みとともに、胃酸が込み上げてきた。
「ヴハッッ」
痛みに思わず声がでる。
我にかえったヴィルは、その「物体」から少し距離をとった。それの正体が探していた獲物だと分かると同時に、背中に担いだ大剣を両手にとりかまえた。「グシュウ！！！」
ロアルドロスが唸り声をあげた。つぎの瞬間周りにいたルドロス達がヴィルに襲いかかる。
ヴィルはルドロス達の攻撃を回避し、ロアルドロスとの距離をつめる。
ヴィルはグランとの作戦を思いだし、ペイントボールをロアルドロスにすれ違いざまに素早く当てた。
ペシャっとおとをたててペイントボールはロアルドロスに当たってはじけた。
ペイントボール独特の匂いが周囲に広がる。
「ペイントボールは当てたぞ、さっさと来ないと終わっちまうぞ」
ヴィルは心の中でそう呟いた。
ヴィルはこれまでロアルドロスを何頭か狩ったことはある。少し油断していたがヴィルは気がつく。
今回の獲物は大物だと。
平均サイズよりも一回り大きい。

「面白い。手かげんは要らんだろ。」
ヴィルは剣を握る手をギュッとかるく握りなおしてロアルドロスに向かって行った、大剣は重く、かまえたままだと走れない。
ゆっくり距離をつめていく。するとロアルドロスがヴィルに向かって勢いよく迫ってきた。
くるっと体を丸めるようにロアルドロスの攻撃を回避してロアルドロスの体の側面につき、大剣を振りかざした。
そしてまた回避してロアルドロスの後ろにぬけた。
また攻撃をかけようといったん大剣をしまおうとしたら、ロアルドロスは尻尾を大きく振った。
「ガバッ」
尻尾はヴィルの背中に当たった。
よろけながろヴィルは振り返り剣をぬいた。
またロアルドロスが突進してくる。一瞬のうちに回避が間に合わないと考え大剣を横にかまえガードするかまえに入った。
足に力をいれ、ふんばり、衝突にそなえる。
ロアルドロスが剣にぶつかる。その瞬間、視界が一瞬真っ白になる。
しかし衝突の衝撃はない。
「なんだ？」
ヴィルがロアルドロスの方を見ると、ロアルドロスは混乱して狂ったように吠えている。周りの小型モンスターも。
「閃光玉か！」
ヴィルが後ろを振り向くとそこには、見覚えのあるペッコ装備の少年。
グランがいた。

第3話・戦線！ロアルドロス狩猟作戦！

「グラン！」
グランのすがたを見たヴィルが叫んだ。
「ずいぶんとやられてますね。回復しますか？」
グランはそう言いながらヴルに近寄ってきた。
「大丈夫だ、これくらい。さぁ、いくぞ！」
ヴィルは目の前のロアルドロスのスポンジ部分に、おもいっきり一撃をいれた。グランはロアルドロスの後ろにまわり、尻尾に斬りかかる。片手剣は大剣とは違い軽く機動性に優れているので、軽く尻尾に3、4撃の攻撃をいれた。
ロアルドロスの混乱がとけ、目の前にいたヴィルに爪をむき出しにした手で斬りかかった。
しかし攻撃に気がつき、間一髪のところで緊急回避、いったん武器をしまいスキをうかがう。
「ヴィルさん！尻尾をおとす。片手剣じゃ火力不足だ。手伝ってください。」
グランが尻尾に斬りかかりながらヴィルに言う。
「了解。でも二人で固まったらパーティーの意味がない。グランはロアルドロスの前で気をひきつつ攻撃してくれ。」
ロアルドロスの側面に攻撃を当てつつ、二人は位置をいれかわった。
ロアルドロスの目がグランをとらえた。
ロアルドロスはグランめがけて体をよこにして、体当たりをしかけた。
「うわっ」　ガキンッ
グランの小さい悲鳴と鉄がこすれる鈍い音がした。
ロアルドロスの攻撃をグランは小さな盾でガードした。しかしバランスをくずし後ろに体がずれる。しかしなんとかもちこたえる。今度はくるっとロアルドロスが体のむきを180度回転させ、尻尾を

攻撃しているヴィルを睨む。と同時にさっきと同じように鋭い爪でヴィルに襲いかかる。
「ヴィルさん危ない！」
グランは思わず声がでる。しかし、ヴィルはその攻撃を回避。
「俺は今まで何頭かロアルドロスを狩ってんだ、だいたいの攻撃はみきった！」ヴィルはそう叫びながら。ロアルドロスの顔に、斬り上げを一発いれた。
グオォォア！！
ロアルドロスは顔から出血し怯んだ。
周りのルドロス達が怒り狂ったようにヴィルに襲いかかる。
が、回し斬りからの叩き斬り。ヴィルの強力な大剣さばきの前では、ルドロス達は無力だった。その隙にグランはロアルドロスの尻尾に連続攻撃。
尻尾に確実にダメージを蓄積させていく。
ロアルドロスは再びヴィルに襲いかかる。体内に蓄えられた水をヴィルめがけて勢いよく発射した。
この攻撃をかわそうとしたが、避けきれず被弾。攻撃をくらってしまった。
「クソッ…、そろそろ回復しないとマズいか…。」
ロアルドロスの隙をうかがうが、なかなか回復のチャンスがこない。スタミナもどんどん減っていく。
「ダメだ、回復できない」
後ろがわで尻尾に攻撃していたグランが、ヴィルが少し弱っているのが確認できた。
「仕方ない。」
グランが回復薬を飲んだ。次の瞬間、ヴィルの体力が回復した。
「グラン。ありがと！」
ヴィルはそうさけびながら攻撃を回避して、ロアルドロスの側面にうつった。

・　スキル　（広域化）
　一部のアイテムを使用した際に、同じエリアにいる仲間にも効果が現れる。

グランのペッコ装備にはこのスキルがついていたのだ。側面にうつったヴィルは、ロアルドロスの足に攻撃を集中させた。
すると、ロアルドロスは怯み、転倒した。
「いまだ！　うぉりあぁ」　ヴィルはスポンジ部分めがけて溜め斬りをしかけた。
確実にダメージを与えていく。狩りのペースは完全にハンターにあった。
ロアルドロスは体勢を立て直した。
後ろで尻尾を攻撃していたグランに尻尾でおもいっきり一撃をあてた。
「うあぁ！」
グランは体勢を崩しその場に倒れこんだ。
一件ただの尻尾攻撃にみえたが、尻尾がグランの腹のみぞにはいった。
激しい痛みと吐き気、　グランは悶絶した。
「グラン！大丈夫かぁ？」ヴィルがグランに叫んだ。　「痛ッてぇぇ…」
グランはそう力なく言うとよろけながらも立ち上った。
　しかし、それを狙ってか、ロアルドロスはグランめがけて突進し始めた。グランはロアルドロスの突進をギリギリのとこで回避。グランはロアルドロスから少し距離をとる。
「大丈夫か？、少し後ろで休んでるか？」
ヴィルはそう言いながらグランに駆け寄る。
「大丈夫です。それにこのクエストは僕のクエストです。それより…尻尾おとしてくださいよ。」
グランは横目にヴィルを見ながら言った。

ロアルドロスは二人めがけて水を勢いよく吐きながら突進してくる。
それを二人は左右別れて回避。
グランはロアルドロスの爪や体当たりをかわしながら足やスポンジ部分を斬りつける。
ヴィルは作戦どうり、ちょこまかと動く尻尾を追って斬りつける。
そして、グランが足を攻撃してロアルドロスが怯んだ瞬間。
ヴィルは尻尾に溜め斬りをいれた。と、その時。
　ズパァァ！！！
空中を舞う尻尾。
怯んで転倒するロアルドロス。
「しぁぁぁぁ！！」
「やったぁ！」
　ヴィルとグランの歓喜の声があたりに響く。二人は転倒したロアルドロスに容赦なく攻撃をする。尻尾が無くなったロアルドロスはかなり戦いやすくなった。
確実にロアルドロスは弱っていく。
「あと、もうひと頑張りですよ！ヴィルさん。」
「わかってるよ！」
ロアルドロスは立ち上がり二人めがけて体当たりをしかけた。
グランはギリギリでガード。
ヴィルは攻撃を回避して、反対側の側面に移動。
休む暇なく斬りかかる。攻撃して回避。
攻撃して回避。
この基本戦術をうまくつかいダメージを与えて続けた。
戦闘開始からどれくらいたっただろうか。
二人はロアルドロスの攻撃を受けたり回避したりで、疲労がたまってきた。
　が。　ロアルドロスはそれ以上に弱っている。
「もう、終わりにしよう、ロアルさんよぉ…」
ヴィルはそういいながら

ロアルドロスを睨み付けた。
グランは少し離れた場所でボロボロの刃を砥石で削る。
その時。
ロアルドロスはヴィルに背中を向け苦しそうに息をはきながら、足を引きずりながらエリアの奥地に逃げていく。
「もう少しだ、いくぞ！」　ヴィルはグランに声をかけ、ロアルドロスを追った。
「もう、待ってくださいよ」
その後ろを小走りでグランが追う。

第3話・戦線！ロアルドロス狩猟作戦！（後書き）

どうも、作者です。
このたびは　ＭＨＰ３ｒｄ・ｆｉｇｈｔｉｎｇハンターをお読みいただいて、ありがとうございます。
こんな小説ですが楽しみにしている方はいるのでしょうか？　もしいたら嬉しいです。
　さて、この小説は誤字脱字があるかもしれません。できるだけ気お付けますのでご了承下さい。
あと、第１話のヴィルの名前が間違っていました。
すいませんでした。
こんな小説ですが、こんごもよろしくお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7651z/

ＭＨＰ３ｒｄ fightingハンター

2011年12月25日23時50分発行